

ピウスツキと北方諸民族文化の研究：ウイルタ語・オルチャ語研究におけるB. ピウスツキ

著者	池上 二良
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	005
ページ	275-282
発行年	1987-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00003761

第 4 章

ピウスツキと北方諸民族文化の研究

ウイльта語・オルチャ語研究における

B. ピウスツキ

池 上 二 良*

アイヌ語・ギリヤク語研究に対する B. ピウスツキ (B. PIŁSUDSKI) の貢献については、すでにひろく知られているが、かれはまたツングース系二言語、ウイльта語（オロッコ語）とオルチャ語についても業績を残しているのである。ウイльта語・オルチャ語についてのかれの業績は、ポーランドの学者コトヴィチ (W. KOTWICZ) によってロシヤの民族学の雑誌のなかの論文 [Котвичъ 1909: 6] において言及されたことがあるが、その業績は刊行されておらず、われわれがそれに接することはできなかった。しかし、最近、ピウスツキの原稿は、クラクフのポーランド科学アカデミーの図書館のなかの古文書庫において、マイエヴィチ (A. F. MAJEWICZ) と井上絃一の両氏によってふたたび発見され、われわれはこれに接することができるようになった。この原稿は、1) ポーランド語で書かれたオロッコ語の文法略説、オロッコ語テキスト、オロッコ・ポーランド語彙、オロッコ語固有名詞の表、およびロシヤ語によるオロッコ語音とオロッコ語単語についての略記、オロッコ語文法素描とオロッコ語テキスト (W. コトヴィチの解説文とピウスツキの書簡文が付いている)、ならびに 2) オルチャ・ポーランド語彙、固有名詞の表、テキストをおさめるポーランド語で書かれたオルチャ族言語資料（はじめにかれ自身の序言が付してある）をふくんでいる。かれは、ウイльта語資料を1904年にカラフトのタライカ湾のポロナイ川河口付近で採集し、またオルチャ語資料を同年カラフトのその地方で、翌年アムール川地方であつめた（ウイльта語資料中のコトヴィチの解説とオルチャ語資料の序言による）。カラフトにおけるかれの研究作業のあとすでに約80年がたっている。ここで、ピウスツキのウイльта語・オルチャ語の記録およびそれについてのかれの記述を言語学とフォークロアの研究の立場から再検討し、そしてかれの業績をウイльта語・オルチャ語の研究史ならびにこれらの言語の歴史において展望することをおこないたい。

ウイльта語研究史の上で、B. ピウスツキ以前には松浦武四郎が19世紀なかばカラフトを旅行し、そこでウイльта語単語を書きとめた [松浦 1860; 高倉 1978; 池上

* 札幌大学女子短期大学部 本館研究協力者

1971, 1979 および 谷沢 1978 参照]。ピウスツキ以後は、中目覚が1912年とその翌年にカラフトをたずね、かれのウイльта語の著作のための資料を採集した [中目 1917 a, b; NAKANOME 1928]。また、1912年に金田一京助がウイльта語単語を採集した。それは刊行された語彙にふくまれている [金田一 1912]。

オルチャ語の研究史の早期においては、18世紀末から19世紀なかばにかけてカラフトで日本人旅行者があつめ、これを当時日本人がサンタンことばとよんだオルチャ語単語がある [池上 1967 参照]。マキシモヴィチ (K. И. МАКСИМОВИЧ) は19世紀の後半にオルチャ語単語を採集した。これはグルーベ (W. GRUBE) のゴルジ・ドイツ語辞典のなかで刊行された [GRUBE 1900]。ピウスツキのすぐあと、1908年にシュミット (P. SCHMIDT) はアムール川下流地方のオルチャ族をふくむ諸民族の実地調査をおこない、採集したオルチャ語単語と若干のテキストを1923年に刊行した [SCHMIDT 1923]。

年代的には、われわれの知る限り、ピウスツキはウイльта語・オルチャ語の今世紀最初の研究者であった。かれは、ウイльта語の最初の文法記述とウイльта語テキスト、ウイльта語語彙および若干のテキストのついたオルチャ語の語彙を作成した。しかし、これらの言語に関するかれの原稿は、少なくともそのあるものが一部のソヴィエトの研究者にはすでに利用できたが、今日まで一般の人々の目からは遠ざけられていた。もし、かれの原稿がもっとはやくに日の目をみていたならば、ウイльта語・オルチャ語研究やアムール川・カラフト地方の研究の進歩にもっと大きな寄与をなしていたことであろう。

ピウスツキによって記録された約180の人名を含む固有名詞の表には、川村秀弥がおそらく1940年代に記録した人名のあるものと同定できる約6人の男性人名がある [川村 1983: 72-76]。さらに、これらの人名および表中の他の3名ほどの人名は、1910年ごろに生れたウイльтаの老婦人佐藤チヨさんの記憶のなかにいまなおのこっている。それらの6名と3名の名前は Boksiiri, Čimuleenu, Čoroldoonu, Ĵawweenu, Mačipari, Tunggokkə と Čeexara, Lojingeenu, Naaksauna である。川村秀弥の記録によれば、同定された人々のうち、最年長者は1817年生れであり、最年少者は1880年生れである。したがって、これらの名前の人々は佐藤さんより一世代ないし二世代上であることがわかる。これらの人々の年齢は、ウイльта語史におけるピウスツキのウイльта語資料の相対的年代を見出すのに手助けとなろう。1876年の生れで、ピウスツキにこのあとふれるおとぎばなしを口述したキシュンギン (Kisungin) は、わたくしがいま上にのべたことを証する一つの実際の事例を供する。

ピウスツキの著述はこれらの言語の研究の早期の段階になされたものであるので、かれのテキストや記述のある箇所は誤っているか、または疑わしいとみられることは避けられない。それにもかかわらず、かれの著述の多くの部分は独特の価値を有している。

わたくしは、ウイルタ語とオルチャ語のかれの文法素描と語彙における注目すべき若干の点に言及したい。

ウイルタ語に関するピウスツキの資料のなかのいくつかの単語には、今日のウイルタ語の対応単語に現れない母音間の *h* がみられる。ピウスツキの資料のなかのそれらの単語の少なくともあるものは、**k* または他のある軟口蓋音を *h* として保存するとみられる。今日のウイルタ語では、母音間の単独の **k* は、幼児語における場合を除いては、消滅したと考えられる。たとえば、*nýmuhu* 「脂肪（溶けていないもの）」（今日のウイルタ語 *nəmuu* 「獣脂」）、エウエン語 *nəmāk* 「脂肪」参照。この *h* は有声摩擦音を表わすものかもしれない。松浦武一郎が書きとめたウイルタ語単語のうち、今日のウイルタ語の *dəsi* 「そりの荷台に敷きならべた棒」に対応するテシキニのような語については池上 [1979: 74] を参照。

つぎに、ウイルタ語の完了の反照連用形は、母音に終る動詞語幹の場合には、池上採集資料ならびにペトローヴァ採集資料にみられるように、語幹に動詞語尾 *-gačči*（単数形）または *-gaččeeri*（複数形）を付加して形成される。しかし、ウイルタ語のある話し手たちはまた動詞語尾 *-xačči*（単数形）または *-xaččeeri*（複数形）がともなう反照連用形を使用する [池上 1984: 10, 11 その他]。ピウスツキもまた *isuxatciri* (= *isuxaččeeri*) 「帰って来てから」のような連用形をあげているのは注意すべきである。*-xačči* という形の存在は、連用形語尾 *-gačči* が **-xačči* の段階を経て完了動名詞の形成素 **-xan* プラスおそらく道具格語尾の一種である **-či* (?) プラス反照単数語尾 **-bi* の結合へさかのぼることを暗示するように思われる。それは、ツングース語の一つ、オロチ語における完了の反照連用形語尾 *-xanʃij* [Цицицус 1949: 156] が完了動名詞の形成素 **-xan* プラス道具格語尾 **-ji* プラス反照単数語尾 **-bi* の結合にさかのぼるのと同様と思われる。

これらの点で、ピウスツキのウイルタ語資料はウイルタ語の早期の段階のいくつかの特色を有している。また、かれのウイルタ語語彙のなかのある数の単語は今日では同定できない。

オルチャ語語彙では、たとえば、オルチャ語 *ja* || ウイルタ語 *da* およびオルチャ語 *di* || ウイルタ語 *ji* のようなオルチャ語と他のツングース語との音韻対応に符合しな

いくつかの語形が、これらの音韻対応に符合する形にまじっているのがみられる。例、bilg'á と bildá 両者とも「のど」、sagdí と sagzí 両者とも「年とった」。音韻対応に符合しない語は、ウイльта語単語であり、これが誤ってオルチャ語単語にまじったとみられる。なぜなら、ピウスツキは、オルチャ語資料の大部分を、カラフトのウイльта人の住む地方へ来てそこに滞在していたオルチャ人から採集したのである(かれのオルチャ語資料の序言による)。ゴルツェフスカヤ (В. А. ГОРЦЕВСКАЯ) は、ピウスツキがオルチャ語とオロッコ語を同一言語と確信してオルチャ語単語とオロッコ語単語を区別しなかったとのべたが [ГОРЦЕВСКАЯ 1959: 21], これは正しくないとみられる。

つぎに、ピウスツキが採集したテキストを扱いたい。かれのウイльта語テキストには、おとぎばなしが一つある。このおとぎばなしのもう一種は、上に言及したウイльта老婦人佐藤チヨさんによってわたくしに口述された。ピウスツキは、この話をサフリのジャンルに入れた。サフリは、ウイльта口頭文芸のジャンルの一つであり、架空物語である。一方、わたくしは、提供者の佐藤さんがその話をサフリの例とみないので、それをサフリのジャンルに入れなかった。しかし、この話をサフリに入れることは、その内容に適切であるように思われる。

この話の梗概を記すと、ねずみの母親とかえるの母親が、一緒に舟をこいで川上へ木になる漿菓をとりに行った。かえるの母親は、木にのぼることができず、木の実をとれなかった。ねずみの母親は、たくさんの木の実をとったが、かえるの母親へひとつもやらなかった。ねずみのこどもたちは喜んだが、かえるのこどもたちは悲しがった。うちへ帰ってから、かえるの母親は大じかをとって、たくさんの肉をえた。ねずみの母親は夜その肉をぬすみに行ったが、ぬすみに失敗し、かえるの母親にひどくぶたれた。ねずみの母親は、けがをして、からすのシャマンとわたりがらすのシャマンと小鳥のシャマンを呼びにやった。けれども、小鳥のシャマンはかの女の本当のことを暴露してかの女に追いかえされた。

若干の箇所では、二人のこの話はたがいに異なる。たとえば、佐藤チヨさん口述のテキストでは、からすのシャマンとわたりがらすのシャマンは本当のことを暴露してかの女をあざけたが、小鳥のシャマンは、ねずみの母親を満足させて報酬をうるために、うその陳述をした。一方、ある数の句は二人の話に共通している。これらの句のあるものは、すでに意味が不明である。たとえば、waŋŋaa waaxani という句が両方に出るが、waaxani は、「そこにけがをした」の意味であるが、waŋŋaa は意味がはっきりしない。ある共通の句は擬音語である。たとえば、tomboo bok bok は、

權を水へ入れる音と水があわ立つ音を表わす。ある表現は、物語のなかで永続的に固定してしまい、その結果として、その表現が二人の話のどちらにも特に保存されたと考えられる。

この話は、当時26才のウイルタの男性のキシュンギンがピウスツキに口述したものである。佐藤チヨさんには、この話のかの女の母によって語られた。佐藤さんの母とキシュンギンは、ほぼ同時代の人であったといえよう。

この話の相異なる二種の比較は、口承において内容と表現の両面でなにかもとのまま残るかを知らぬかぎを与える。

つぎに、ピウスツキのウイルタ語資料は16のなぞなぞをふくんでいる。そのうちの七つは池上のウイルタ語資料中佐藤チヨさんが口述したなぞなぞと一致し [池上 1984: 82-84]、六つはペトローヴァのテキスト中のなぞなぞと一致するが [ПЕТРОВА 1967]、七つはどちらのテキストにもみられないものである。

ウイルタのなぞなぞは、gaŋ gaŋ gajagoo という導入句ではじまり、つぎになぞかけの内容が言い表わされ、それから、「(それ) なあに、(あててごらん)」の意味の (tari) xaigəək (toksiik unuu) のような正しい解答の要請でとじられる (括弧内の部分は省略されることもある)。こたえの最後の母音は長くのばして発音され、通常(並列的単語の場合を除いて) k 音が末尾につけ加えられる。

なぞなぞ問答のこの修辭的形式は、佐藤さんがわたくしに口述したなぞなぞにみられるが、ペトローヴァのなぞなぞのテキストにはみられない。ピウスツキのなぞなぞはまたなぞなぞ問答のこの修辭的形式の存在の証左を供する。

ほかに、かれのテキストには、歌 (xəəgə 即興歌 3 篇と子守り歌 1 篇) と言い伝えと文例がある。言い伝えとして、ウイルタの起源についての短い話、偶像 (お守り) 約 6 点の説明、血の病の治療法などのほかに、火への祈禱のことがばがある。この祈禱のことがばは貴重であろう。

かれはつねにテキストをそれが語られるそのままに書きとめる努力をしたと、わたくしには思われる。ピウスツキが記録したウイルタ語テキストをみていると、話し手が語ったさまが、ありありと感じとれるように思われることがある。かれはよき野外研究者であったと、わたくしは思う。

かれのテキストは、蓄音器の円筒にも、磁気録音テープにも保存されたものでなく、かれ自身の手で書きとめられたものである。それにもかかわらず、かれのテキストはもとの口述に忠実であるとみられ、今日なおウイルタ語・オルチャ語研究に役立つ。かれの業績は、アイヌ語研究におけると同様に、ウイルタ語・オルチャ語研究におい

でも決して忘れられることはないだろう。

附記

なおまたピウスツキの研究分野について言えば、それは言語学と民族学にわたっている。ここでは民族学という用語の意味を、民族誌や民俗学もふくめて非常に広くとっていただきたい。言語学と民族学という二つの学問分野が、ピウスツキというひとりの研究者において分化せず一体をなしている。このことは、ピウスツキだけでなく、当時のロシアの V. G. ボゴラースや L. YA. シュテルンベルグも、またアメリカの F. ボアズもそうであったろう。その後、研究が進むにつれ、これらの学問は専門化して分化した。これは、両者の専門研究が非常に進歩したことによる。言語学においては、その固有分野といえる音韻や文法の研究が著しく進み、精密になった。それは、ピウスツキの時代の比ではないと言えよう。しかし、そのように進歩してきた今日の段階において、両学問はあらためてそれぞれの研究成果を相互にとり入れ、再び連携し、総合化して行くことが必要ではないかと思う。

言語学の側についてみると、たとえば言語の意味の記述、語義の記述を的確におこなうためには、民族学の成果として得られた知識をとり入れることが必要であろう。基礎語彙も、少なくとも一面では、その言語の話し手たちの生活、文化に立って考えるべきものであろう。また基礎語彙に関して、人間言語の基礎語彙における普遍性をさぐるようなとき、まず個別言語の基礎語彙をあきらかにすることが前提であり、これの正確な記述は、各言語について民族学的知識に基いておこなうことが必須であろう。その普遍性の探索も、こうして記述された諸言語の基礎語彙を通してなされるべきであろう。

一方、民族学の側を考えると、一民族の文化を理解し、把握するためには、その民族の言語によらざるをえない面が大きい。口碑、神話、宗教、宇宙観については言うまでもない。物質文化についても、一民族の物質文化を体系的に理解、把握するためには、その民族の言語によることも必要であろう。folk taxonomy がわからなければ、一民族の物質文化も十分には理解できないだろう。そのためにも、各文化要素についてその本来の言語における正確な名称を知ることが必要である。具体的には、博物館の民具の分類、展示にも関係するだろう。展示物には、その言語による正確な名称も記載することが望ましいと思う。

実は、筆者は北海道教育委員会から依頼されてウイльта民俗文化財緊急調査を8年ほどおこなってきて、このことを感じたのである。このことはアイヌ文化研究におい

でも同様であろう。

ピウスツキを主題においた今回の機会に、こうしたことを改めて考えることは有意義であり、重要であると思う。実際におこなわれる研究において、両学問の研究がたがいの成果をとり入れ合い、連携し結合して行くことが大切であり、研究が今後このような方向に向って行くことを望んでやまない。

本稿は1985年9月北海道大学で開催されたピウスツキに関する国際シンポジウムでの口頭発表の英文原稿を和訳し、若干の補訂をしたものである。なお附記は1986年2月28日国立民族学博物館におけるピウスツキ研究会での研究発表につけ加えてのべたものである。

謝 辞

A. F. MAJEWICZ 博士と R. KASZA 氏に、ピウスツキの原稿中のポーランド語の記述および語義注解の英訳を用意下さったことに対して深く感謝の意を表す。

文 献

池上二良

1967 「サンタンことば集」『北方文化研究』2: 27-87.

1971 「19世紀なかごろのオロッコ語集」『北方文化研究』5: 79-184.

池上二良編・解説

1979 『ウイルタ古画集録』札幌：北海道教育委員会・北海道文化財保護協会。

池上二良採録・訳注

1984 『ウイルタ口頭文芸原文集』札幌：北海道教育委員会，網走：網走市北方民俗文化保存協会。

川村秀弥採録，池上二良編

1983 『カラフト諸民族の言語と民俗』札幌：北海道教育委員会，網走：網走市北方民俗文化保存協会。

金田一京助編

1912 『日本国内諸人種の言語』東京：東京人類学会。

松浦武四郎

1860 『北蝦夷餘誌』江戸。

中目 覚

1917a 『樺太の話』東京：三省堂。

1917b 『オロッコ文典』東京：三省堂。

高倉新一郎（解説）

1978 『竹四郎廻浦日記 下』札幌：北海道出版企画センター。

谷澤尚一

1978 「安政三年採録のニクブン語彙を繞って」『北方文化研究』13: 135-161.

GRUBE, W.

1900 *Goldisch-deutsches Wörterverzeichnis, Dr. Leop. v. Schrenck's Reisen und Forschungen im*

Amur-Lande. Anhang zum III. Bande, St. Petersburg.

NAKANOME, A.

1928 *Grammatik der Oroko-Sprache.* Osaka.

SCHMIDT, P.

1923 The Language of the Olchas. *Acta Universitatis Latviensis VIII.*

ГОРЦЕВСКАЯ, В. А.

1959 Очерк истории изучения тунгуско-маньчжурских языков. УЧПЕДГИЗ, Ленинград.

Котвичъ, Вл.

1909 Материалы для изученія тунгусскихъ нарѣчій. Живая Старина.

ПЕТРОВА, Т. И.

1967 Язык ороков(ульта). НАУКА, Ленинград.

Цинциус, В. И.

1949 Очерк морфологии ороцкого языка. Ученые записки ЛГУ, Ио. 98, Серия востоковедческих наук, вып. 1.